



ビブリア古書堂の事件手帖

スペシャル掌編

三上 延

太宰治『待つ』

お母さんへ。

こんばんは、文香です。

さっきうちに帰ってきて、お店のパソコンでこれを書いてます。母屋にあるパソコンが調子悪いし、携帯で長い文章打つのは苦手だから、お店のを借りてます。外はすごく暑くて、すごく静か。横須賀線もさっき行ったり帰ったりで、駅のホームからは人の声とか足音も聞こえない。店の中は真つ暗です。

だいたい夜も遅いけど、まだお姉ちゃんも帰ってきてません。今日は五浦さんのうちにお邪魔して、五浦さんのお母さんと三人で晩ご飯を食べてる。たぶん仲良くお酒とか飲んでるんだと思う。五浦さんのお母さんも日本酒好きみたいだし。

今日、メールを書いたのは、ついこの前お母さんが教えてくれた小説を読んだから。読書感想文の課題をどの本にするか悩んで、短くてすぐ読めて分かりやすいのがいい、って無茶振りしたらすすめてくれた話。太宰治

の『待つ』。本当に短いらしくて読めたよ。

若い女の人が駅前で誰かを待ってる、タイトルそのまんまの内容。誰かっというのが、人間なのかどうか本人も分かってない。「ばつと明るい、素晴らしいもの。なんだか、わからない。たとえば、春のようなもの。いや、ちがう。青葉。五月。麦畑を流れる清水。やつぱり、ちがう。ああ、けれども私は待っているのです」。

お母さんは太宰治の小説でこれが特に好きって言ってたよね。不思議とたまに読み返しちゃうって。主人公は「私は、人間をきらいです。いいえ、こわいのです」とか言っちゃう内気な人だし、お母さんはおとなしく誰かを待つんじゃないかって、自分から家を出て行っちゃうような人だから、この話のどこを好きなのか疑問だったんだけど、何回か読むうちにちよつとだけ分かってきた。

この主人公は、お姉ちゃんにちよつと似てるよね。人とうまく話せなくて、駅前のビブリア古書堂で毎日お客さん待ってる。「よほどの事でもない限り、私のほうからお友達の方へ遊びに行く事などは致しませんでした」とか、そろそろリュウちゃんに連絡しようかな、って毎日言いながらぐずぐずしてるお姉ちゃんを思い出した。

たよ。お母さんはそういうのが懐かしかったんじゃないのかな。

もうこんな読書感想文でもなんでもなくて、この小説を読んだお母さんへの感想文だから、たぶん課題にこの小説選はないんだけど、もう一つ思ったことがあって。お母さんは心のどこかで、お姉ちゃんも待ってる誰かになったかたっちゃんじゃないのかな。お姉ちゃんにとつての「ばつと明るい、素晴らしいもの」に。それで、そのまま一緒にどこかへ行きたかったんじゃないのかな。

でもまあ、お姉ちゃんはおとなしく待つ人じゃないんだよね。この話の主人公だつてそう。これって他人に向けた内容で、最後の方は「私を忘れないで下さいませ」とかってはつきり語りかけてるし。こういう人はただ受け身で待ったりできない気がする。その誰かが来ても来なくても、結局は自分が今って思うタイミングで、どこかへ出発するんじゃないかな。

お母さんもそういう人だし、あたしもそう育ったと思う。今もこうして駅のすぐ近くにいるわけだけど、別にお姉ちゃんを待ったりはしてない。帰ってくるはずなのに帰ってこなかったら心配するけど、帰らないのが分

かつたら母屋に戻って寝るだけ。まあ、寝る前に夏期講習の復習はちよつとやるけど。

お母さんのことも別に待ってない。十年も家族はつたらかしにして、って思っているけど、お母さんなしでも我ながら立派に成長したから、ぐちぐち文句言う気分にならない。四月に会った時「本当に大きくなったわね」って褒められたのは嬉しかったよ。ふふん、あたしの勝ちだなって思った。

なに書いているのか自分でも分からなくなってきた。そろそろやめるね。毎日駅へお迎えには行ったりしないけど、駅近くのこの家に住んでる十七の娘を覚えていてくれると嬉しいよ。その小さい駅の名は、教えなくても分かる北鎌倉。わざわざ待ったりはしてない。でも、たまにはあたしたちの顔を見に来て。会ってお喋りぐらいはしたいから。

それではまた。おやすみなさい。

※本作は、2017年2月発売の

『ビブリア古書堂の事件手帳7』1巻と2巻と集めてない舞台！
発売記念として、一部書店で配布されたリーフレットに収録されたものです。